

国道バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

平成 8 年度

1997. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
建設省 四 国 地 方 建 設 局

## 例 言

1. 本書は国道バイパス建設に伴い、平成8年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要を記録したものである。なお本年度は吉野下秀石（よしのしもひでいし）遺跡・西浦谷（にしうらたに）遺跡の発掘調査および鴨部・川田（かべ・かわた）遺跡の整理作業を実施した。
2. 本事業は、建設省四国地方建設局から委託を受け、調査主体 香川県教育委員会、調査担当 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの、本事業に関する調査体制は次の通りである。

総括	所 長	大森忠彦
	次 長	小野善範
	調査総括主任	廣瀬常雄
総務	係 長	前田和也
	主任主事	西村厚二（～平8.5.31）
	主 事	佐々木隆司（平8.6.1～）
	参 事	別枝義昭
	参 事	近藤和史
調査	文化財専門員	大久保徹也
	文化財専門員	森下友子
	文化財専門員	森 格也
	主任技師	樋本清輝
	技 師	住野正和
	調査技術員	高橋佳緒里
	調査技術員	三好弘美

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して感謝したい。（順不同敬称略）  
満濃町役場・満濃町教育委員会・吉野下地区連合自治会・満濃池土地改良区・三木町教育委員会
5. 本書の執筆は大久保（Ⅰ・Ⅱ－1）、森下（Ⅱ－2）、森（Ⅲ）、樋本（Ⅱ－2）が行い、大久保、高橋が編集した。
6. 挿図の一部に国土地理院発行地形図（1/50,000丸亀・池田・高松南部）を使用した。

## 本文目次

I. 平成8年度調査概要(大久保).....	(1)
II. 発掘調査の概要報告	
1. 吉野下秀石遺跡(大久保).....	(2)
2. 西浦谷遺跡(森下・樋本).....	(12)
III. 資料整理の概要報告	
1. 鴨部川田遺跡(森).....	(19)

## 挿図目次

### 吉野下秀石遺跡

図1 遺跡位置図(1/50,000).....	(2)
図2 遺構配置図(1/500)・調査区割図(1/4,000).....	(3)
図3 竪穴住居SH14平・断面図(1/40,1/80).....	(5)
図4 竪穴住居SH15平・断面図(1/40,1/80).....	(6)
図5 竪穴住居SH16平・断面図(1/40,1/80).....	(7)
図6 竪穴住居SH12・17平・断面図(1/40,1/80).....	(8)
図7 掘立柱建物SB07・08・09平・断面図(1/80).....	(9)

### 西浦谷遺跡

図8 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000).....	(12)
図9 調査区割図(1/2,000).....	(13)
図10 SH1001・1005・1007平・断面図(1/40).....	(14)
図11 SH1001・1005・1007、SP1008出土土器(1/4).....	(14)
図12 遺構配置図(1/500).....	(15~16)

### 鴨部・川田遺跡

図13 鴨部・川田遺跡出土遺物(1/2).....	(20)
---------------------------	------

## 表目次

表1 平成8年度国道調査に伴う埋蔵文化財調査事業一覧並びに工程表.....	(1)
表2 平成8年度鴨部川田遺跡整理工程.....	(19)

## 写真目次

### 西浦谷遺跡

写真1 SH1001・1005・1007付近(西から).....	(14)
写真2 SH1001・1005・1007付近(西から).....	(14)
写真3 SE1001(東から).....	(17)
写真4 SK1018(南から).....	(17)
写真5 SK1007(東から).....	(17)

# I. 平成8年度調査概要

平成8年度の国道バイパス埋蔵文化財調査事業は、発掘調査業務と整理業務よりなる。発掘業務としては一般国道32号満濃バイパス建設に伴う満濃町吉野下秀石遺跡と、一般国道11号高松東道路（三木～津田）建設に伴う西浦谷遺跡の調査を実施した。前者は平成5年度に調査を着手したが、調査対象地の一部に用地取得未了部分があり、その部分を対象に発掘調査を実施した。後者は昨年度業務の継続調査で、両遺跡とも今年度作業で発掘調査を完了した。

同時に両遺跡の調査終了をもって一般国道32号満濃バイパス建設事業、一般国道11号高松東道路（三木～津田）建設事業に伴う発掘調査業務はすべて完了した。なお、前者は平成4年度から着手し、2遺跡16,500㎡の発掘を行った。後者は平成2年度から5遺跡31,211㎡を調査したことになる。

また本年度の整理業務としては昨年度に引き続き志度町鴨部川田遺跡の整理作業を実施した。同遺跡は一般国道11号高松東道路（三木～津田）建設に伴い平成2・3年度に調査した弥生時代前期の環濠集落で未製品を含む各種木製品および多種多様な石器類等の出土で既に著名である。本年度は平成2年度発掘調査資料の整理作業を進めており、次年度から報告書の刊行を予定している。

吉野下秀石遺跡は平成5年度に引き続き、今年度は残余の1,190㎡の調査を実施した。前回調査同様に古墳時代後期後半の竪穴住居5棟等を確認し、丸亀平野奥部の代表的な古墳時代集落遺跡資料となった。これまでの調査によってこの時期の竪穴住居構造に関する詳細なデータの蓄積がなされると共に、比較的状況が不明瞭であった土師器組成の検討を可能とした。また鉄滓等、鍛冶関係遺物や製塩土器の出土は注意を要するであろう。

西浦谷遺跡は高松平野西縁、前田丘陵南部に位置する。これまでに弥生後期前葉の高地性集落、後期古墳、時期不詳の狩猟用落とし穴を確認している。高地性集落の構成物としては竪穴住居・掘立柱建物・段状遺構・貯蔵穴等がある。各遺構の形状・構造や遺構相互の関係について今後慎重な検討を重ねなければならない。また遺跡の性格は、少なくとも前田丘陵に点在するほぼ同時期の比較的短期の高地性集落群や前田東中村遺跡など裾部に位置し、より存続期間の長い集落群との関係を視野に入れて評価する必要があるだろう。（大久保）

区分	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査工程														
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
発掘	吉野下秀石遺跡	1,190			■	■	■	■									
	西浦谷遺跡	2,272								■	■	■	■	■			
	(合計)	3,462															
整理	鴨部・川田遺跡	—	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

表1 平成8年度国道建設に伴う埋蔵文化財調査事業一覧並びに工程表

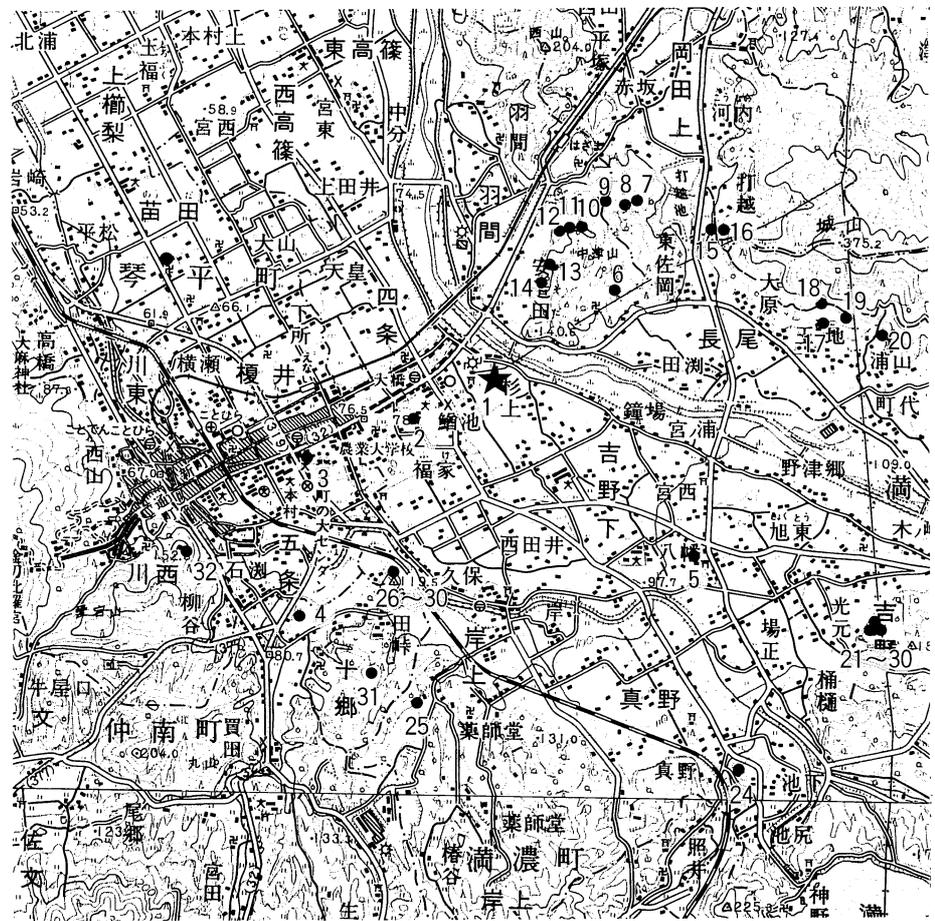
## II. 発掘調査の概要報告

### 1. 吉野下秀石遺跡の発掘調査

#### (1) 遺跡の立地と環境

吉野下秀石遺跡は丸亀平野の奥部、仲多度郡満濃町吉野に所在する。阿讃山中に発して、高鉢山塊南麓に沿って西北流してきた丸亀平野の主要河川 土器川は平野南端に近い満濃町吉野・高篠の境付近で大きく湾曲して北流を始める。吉野下秀石遺跡はこの湾曲部左岸、標高85m前後に位置する。現河床から大略300m隔たる。周辺一帯は土器川の形成する平野奥部の扇状地形が卓越し、地表面にも礫層の露出が比較的顕著である。土器川の河床低下により周囲は顕著に段丘化して、現状では遺構面と河床との比高は優に5mを越える。また一帯は土器川あるいは金倉川支流による小開析谷が錯綜し、地表の凹凸を際だたせている。おそらくこうした条件に規定されて、丸亀平野の主要部分に広がる、いわゆる条里地割は隣接する満濃町四条地区・高篠地区までは及ぶものの本遺跡周辺には到達していない。なお丸亀平野の本遺跡周辺以奥ではわずかに土器川右岸の旧鵜足郡長尾地域、金倉川左岸の旧那珂郡真野地域に分散して狭隘なまとまりが認められるに過ぎない。以上から、本遺跡周辺は土地条件に恵まれた地域とは言い難く、むしろ大規模な耕地開発にはより多大な労力を要する地帯と見ることが出来るであろう。

丸亀平野最奥部の遺跡分布は今のところ詳らかではない点が多い。弥生時代では、吉野八幡社で銅鐸出土



- |                        |                     |                   |
|------------------------|---------------------|-------------------|
| 1 吉野下秀石遺跡              | 11 安造田東2号墳 (古墳 横穴)  | 22 南泉寺2号墳 (古墳 不詳) |
| 2 弘安寺廃寺 (寺院)           | 12 安造田東3号墳 (古墳 横穴)  | 23 南泉寺3号墳 (古墳 不詳) |
| 3 榎井遺跡 (散布地 弥生)        | 13 安造田神社裏古墳 (古墳 不詳) | 24 小山古墳 (古墳 不詳)   |
| 4 買田岡下遺跡 (集落 弥生・古代・中世) | 14 安造田神社古墳 (古墳 横穴)  | 25 椿谷古墳 (古墳 横穴)   |
| 5 吉野八幡神社遺跡 (銅鐸埋納)      | 15 岡田5号石棺 (古墳 不詳)   | 26 三塚山1号墳 (古墳 不詳) |
| 6 佐岡遺跡 (銅劍埋納)          | 16 岡田6号石棺 (古墳 不詳)   | 27 三塚山2号墳 (古墳 不詳) |
| 7 平石1号墳 (古墳 不詳)        | 17 断頭墓地1号墳 (古墳 不詳)  | 28 三塚山3号墳 (古墳 不詳) |
| 8 平石2号墳 (古墳 不詳)        | 18 断頭墓地2号墳 (古墳 横穴)  | 29 三塚山4号墳 (古墳 不詳) |
| 9 安造田峠東古墳 (古墳 横穴)      | 19 光明寺池上古墳 (古墳 不詳)  | 30 三塚山5号墳 (古墳 不詳) |
| 10 安造田東1号墳 (古墳 横穴)     | 20 天神塚古墳 (古墳 不詳)    | 31 買田峠古墳 (古墳 不詳)  |
|                        | 21 南泉寺1号墳 (古墳 不詳)   | 32 愛宕山古墳 (古墳 不詳)  |

図1 遺跡位置図 (1/50,000)

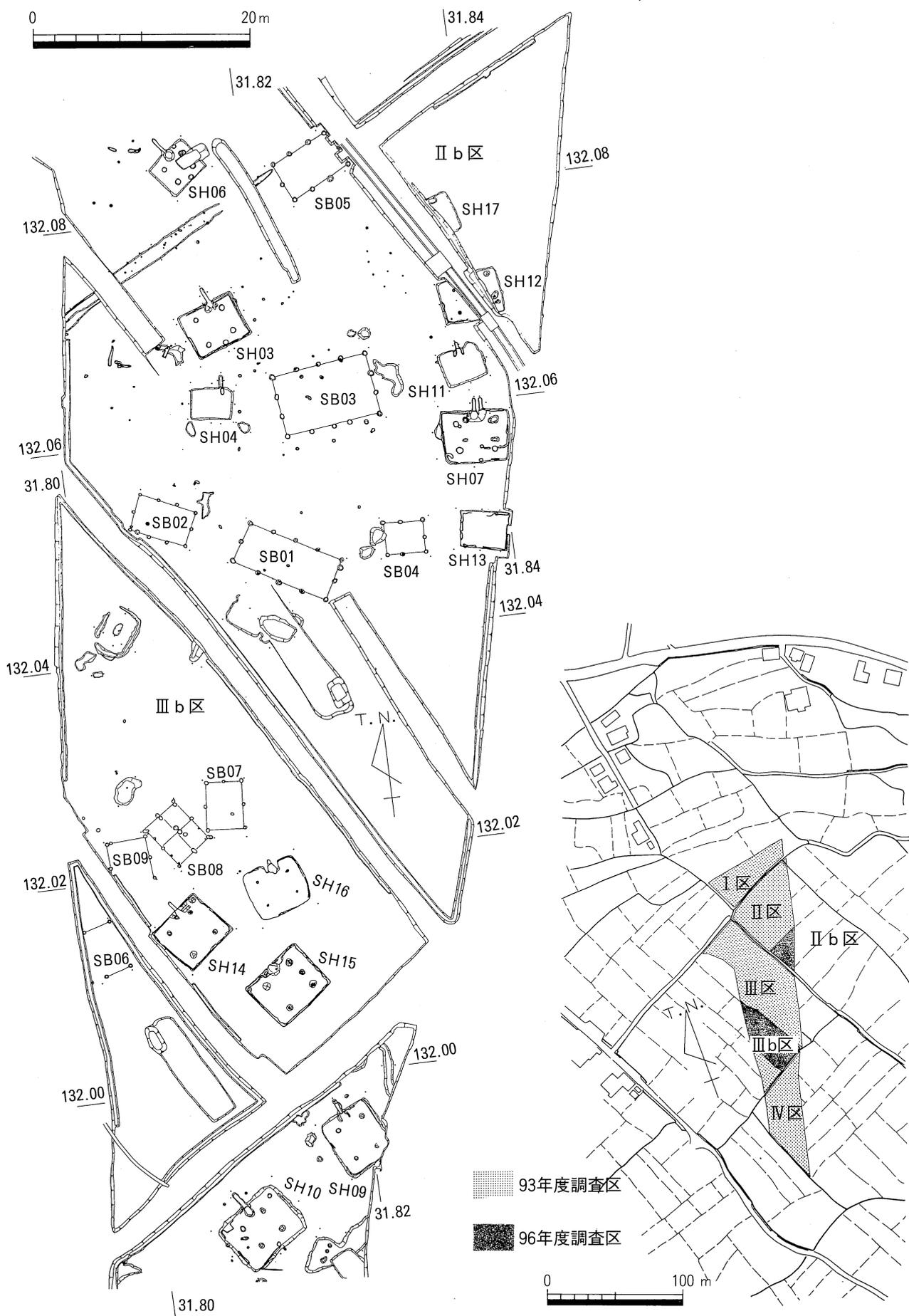


図2 遺溝配置図 (1/500)・調査区割図 (1/4,000)

を伝え、土器川右岸の佐岡丘陵では平型銅剣2本が出土している。集落遺跡では本遺跡（後期前葉）、仲南町買田岡下遺跡（後期後半～古墳時代前期）の他、実態不明の榎井遺跡が知られるに過ぎない。

今のところ、確実な前期古墳は知られていない。土器川右岸の長尾地域ではおそらく中期以降の小首長墓系列と見られる天神七つ塚古墳群をはじめとする中期～後期の古墳が比較的濃密に分布するが、その幾つかは精密な調査を経ることなく煙滅の危機にある。また土器川を挟んで本遺跡と向かい合う羽間丘陵には安造田神社古墳、安造田東3号墳といった大形横穴石室墳をはじめ後期古墳が集中する。一方、金倉川左岸の丘陵地帯ではわずかに中期と推定される買田峠古墳群、後期の椿谷古墳を除けば、有力墳やまとまった古墳群形成は知られていない。この時期の集落は今のところ本遺跡がほぼ唯一例である。

白鳳期創建の古代寺院 弘安寺跡は本遺跡の西方約500mの満濃町四条東村に所在する。上述した条里地割分布域の縁辺部に位置するものの、方一町あるいは東西一町南北二町とも推定される寺域軸線はこれより約27° 東にずれる点で注目される。買田岡下遺跡ではやや下って平安時代前半期の大型建物群に伴って瓦、緑釉陶器、銅製銚帯（巡方・丸柄）が出土している。（大久保）

## (2) 調査の概要

土器川左岸の扇状地帯に位置する吉野下秀石遺跡は、浅い低地帯で分断された東西2条の高まりに集落が広がる。低地以東では前回調査で弥生時代後期前葉の竪穴住居2棟等を確認している。一方西側の高まりには古墳時代後期の集落が広がる。今次調査の対象地は二つの区画（Ⅱb区・Ⅲb区）に分かれるが共に西側微高地部分に相当する。前者は同微高地の縁辺部から低地帯に位置する。Ⅱb区の調査では古墳時代後期の竪穴住居を検出した他、低地帯埋積土上層で古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層を確認した。古墳時代後期の集落形成時期には、この低地帯の埋没は完了せず緩やかな凹地として残されていたことを明らかにした。また古墳時代集落範囲に位置するⅢb区では竪穴住居などを検出した。

### 竪穴住居

S H 14 東西5.5m×南北5mの長方形を呈する。残存深は0.3m前後と今次調査で検出した住居では良好な部類である。含礫層に掘り込んだにも関わらず、貼床は確認していない。ほぼ全域の床面直上に生活堆積層と見られる汚れた灰褐色層が広がる。それより上位は埋め戻し土と見られる乱雑な地山土・黒色系粘質土のブロック状堆積が見られる。竈は北辺で中軸線より0.5m近く東に偏る。住居外郭の各辺はほぼ直線をなす。検出した主柱穴4基は住居壁面より0.9～1.2mの距離をもち、住居平面形が長方形を呈するにも関わらず柱配置は正方形に近い。（柱間2.8m）いずれの掘り方も浅く上縁が大きく開く。柱痕跡は認められない。廃絶時の抜き取りを想定したい。住居壁溝は浅く部位によって多少形状・規模を違えるがほぼ全周し、竈裏面の一部に及ぶ。竈は左右袖部の基底から盛土を持って築き上げ、煙道は水平に0.9m強延びる。竈の規模は内法で奥行き0.7mを測り、幅は中央部で約0.5m、前面で0.7mと鈍く開く。外殻の形状規模は十分復元できなかったが袖は中程で0.4～0.5mの厚みをもつ。浅く掘り窪めた落ち込みを若干の置土で覆い竈床とする。竈中央には土師器高坏を伏せて据える。竈内堆積物や天井崩落層に半ば埋もれた状態から転用支脚と推定する。

S H 15 東西6.1m×南北5mの長方形を呈する。残存深は0.15m前後と削平が著しく、煙道も残存しない。床面は含礫層に達しているが貼床は確認していない。本住居の場合、残存深が乏

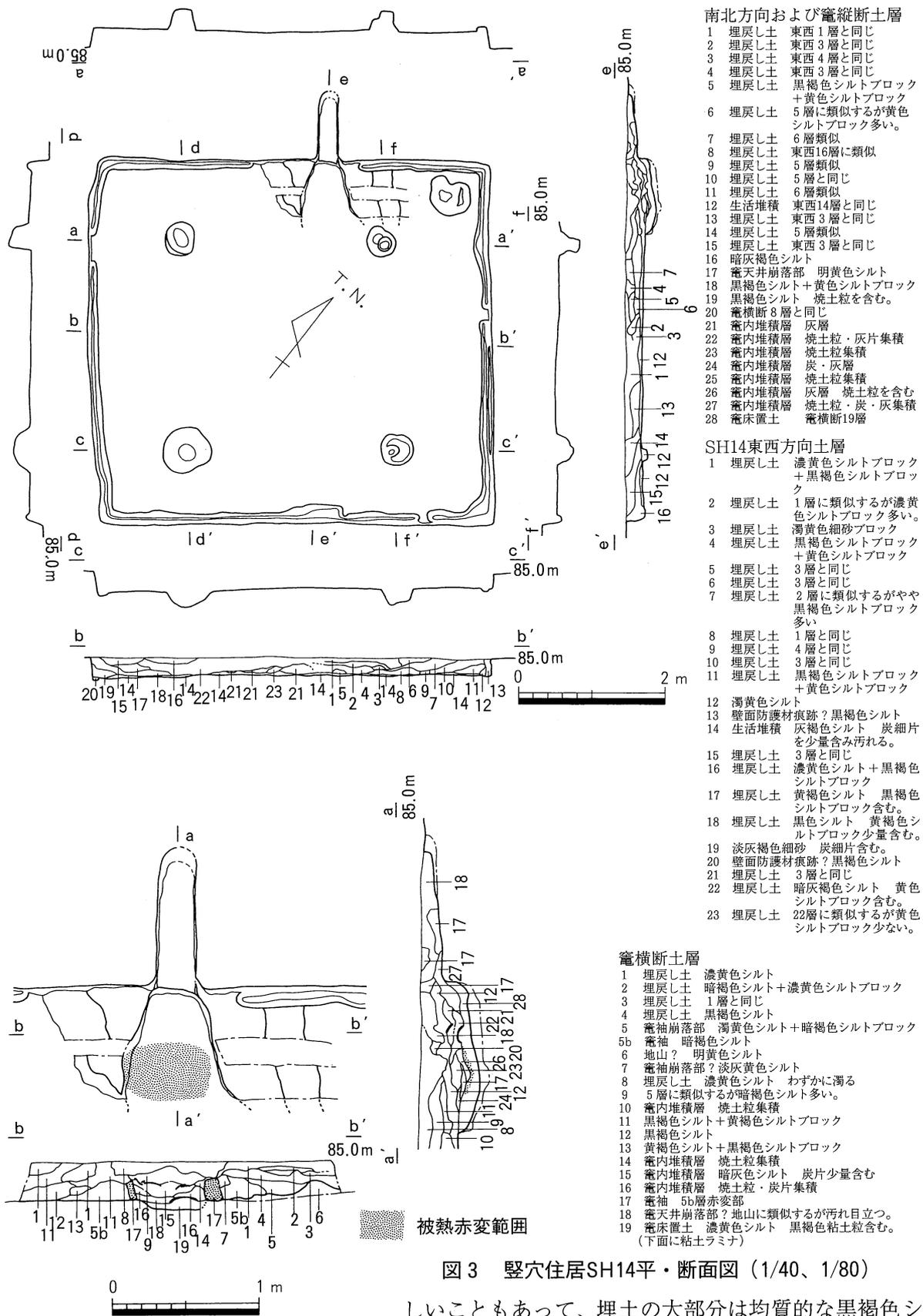


図3 竈穴住居SH14平・断面図 (1/40、1/80)

しいこともあって、埋土の大部分は均質的な黒褐色シルト層からなり、「埋め戻し」は確認できなかった。竈は北辺でほぼ中軸線上に位置する。住居外郭の各辺はほぼ直線をなす。検出した支柱穴4基は住居南北辺より1.2m、東西辺より1.5~1.6mの距離に位置し、住居外郭に近似した矩形に配される。柱掘り方は浅く上縁が大きく開き柱痕跡は認められない。やはり廃絶時の抜き取りを

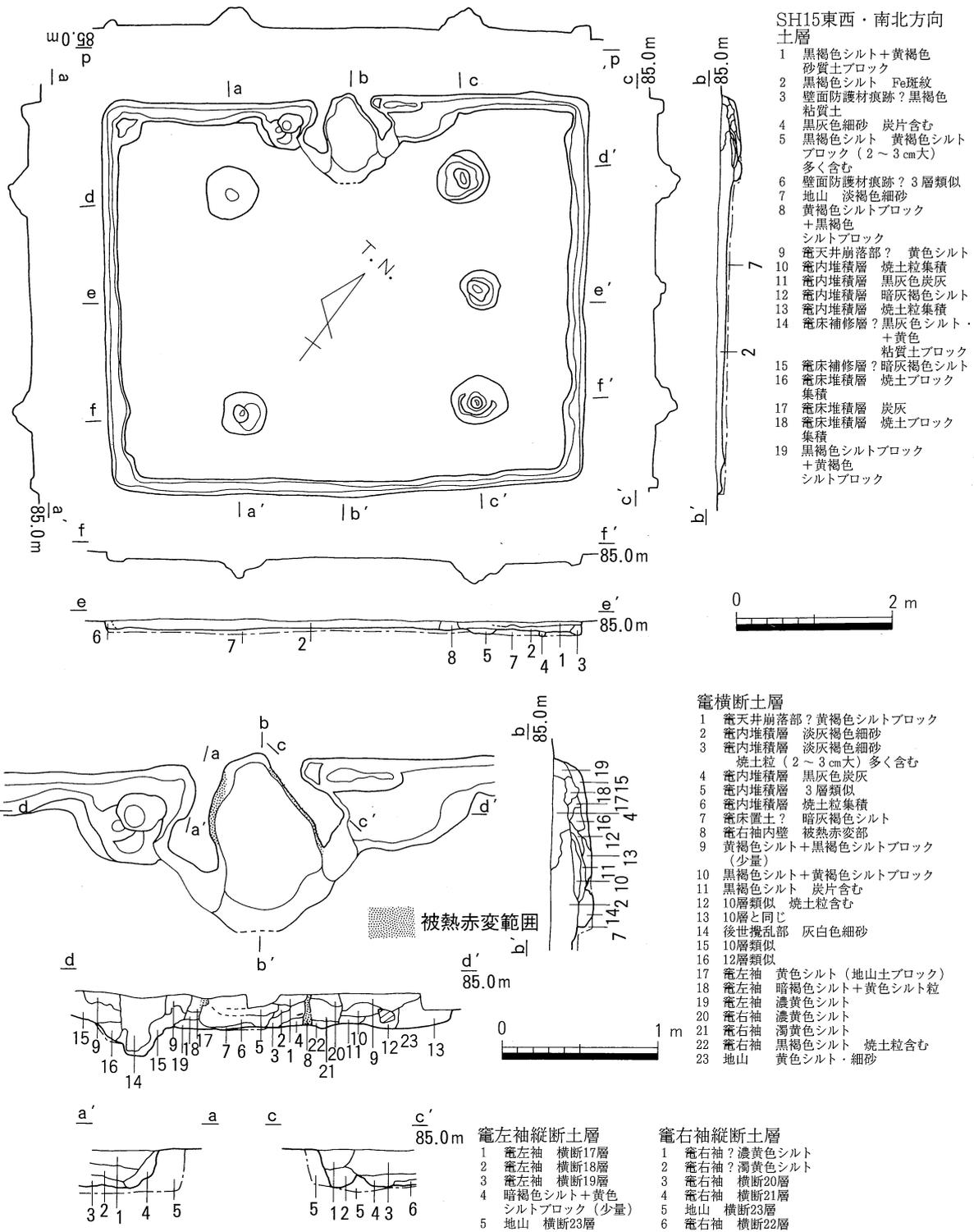
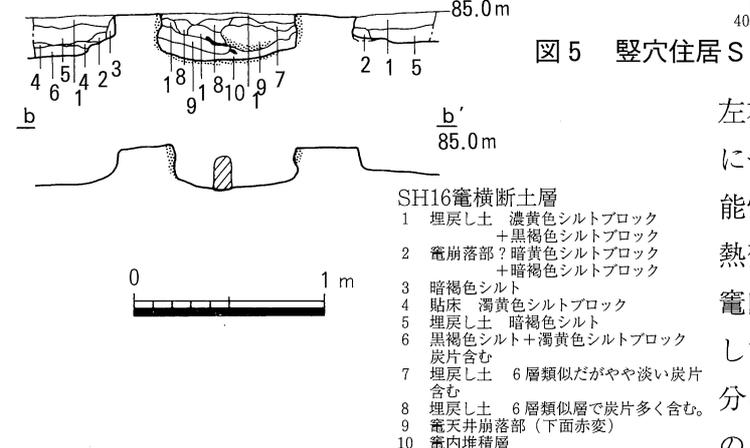
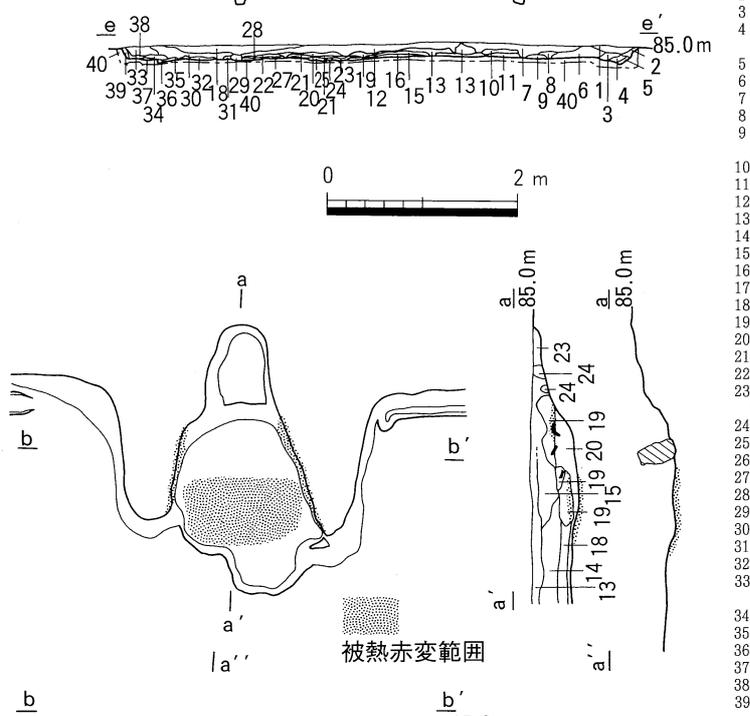
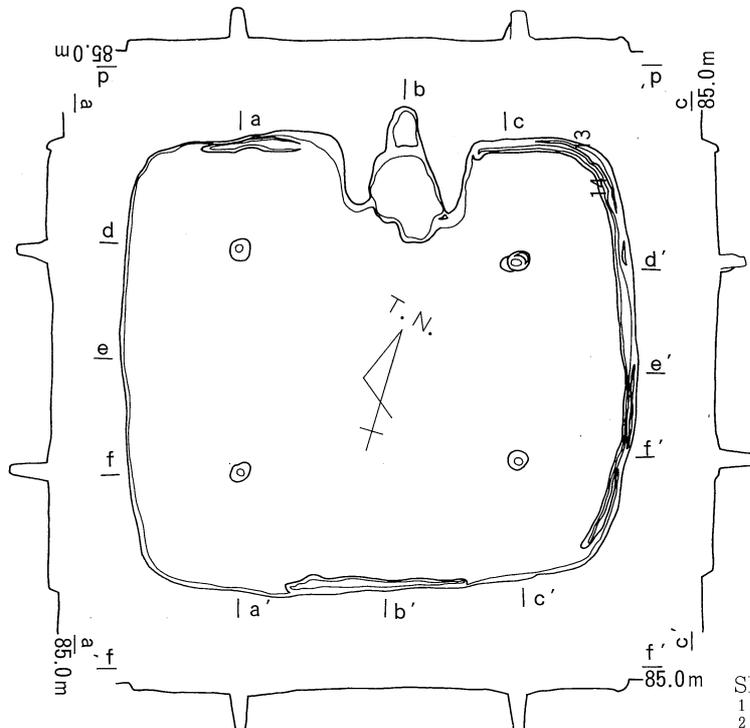


図4 竈穴住居SH15平・断面図 (1/40、1/80)

想定したい。なお東辺2穴の間に浅い掘り込みがあるが柱穴とは明らかに形状を異にする。住居壁溝は全周し、竈部掘り込みに連結する。竈は左右袖部の基底から盛土を持って築き上げる構造で、煙道は既に失っているが竈奥壁に明瞭な段を有するので、SH14と同じ形態が想定できる。住居北辺中央に幅2.6m、奥行き1m強の平面凸形に近似した浅い掘り込みをまず穿ち、この部分を三分するように「ハ」字状に厚み0.2m内外の土堤を築く。これが竈袖となる。さてこの部分の断面観察では右袖下層に顕著に焼土粒・炭細片を含むブロックが認められ、左袖でもやや汚れたブロックを含む。したがって現存する竈は一旦補修された可能性がある。竈



SH16竈縦断及び竈穴南北土層

- 1 埋戻し土 黒褐色シルト+濃黄色シルト(地山土)ブロック
- 2 壁体防護材痕跡? 暗褐色シルト+灰色細砂
- 3 草根による変色部
- 4 埋戻し土 黒褐色シルト 1~3cm大の地山土ブロック少量含む
- 5 貼床 濁黄色粘質土 地山土に類似するが汚れ目立つ
- 6 黒褐色シルトブロック+濃黄色シルト(地山土)ブロック
- 7 淡黄色シルトブロック
- 8 暗褐色シルト
- 9 暗褐色シルト
- 10 貼床 暗褐色シルトブロック+暗黄色シルトブロック
- 11 暗褐色シルトブロック+暗黄色シルトブロック
- 12 地山 淡黄色シルト
- 13 埋戻し土 竈横断1層
- 14 埋戻し土 竈横断7層
- 15 埋戻し土 竈横断8層
- 16 埋戻し土 4層と同じ
- 17 埋戻し土 黄褐色シルトブロック+黒褐色シルト
- 18 埋戻し土 黒褐色シルト 1~3cm大の地山土ブロック少量含む
- 19 崩落竈天井 黄色シルトブロック(下面、厚2~5cm赤変)
- 20 竈内堆積層 炭片 焼土粒多く含む。
- 21 生活堆積 暗褐色シルト わずかに炭細片含む
- 22 生活堆積 竈横断6層類似層で焼土粒目立つ
- 23 埋戻し土? 竈横断6層
- 24 煙道部崩落天井 黄色シルト(地山土)ブロック

SH16竈穴東西断面土層

- 1 埋戻し土 暗褐色シルト 2~3cm大の地山土ブロック少量含む。
- 2 埋戻し土 暗褐色シルト 2~3cm大の地山土ブロック多く含む。
- 3 暗黄色シルト 地山土ブロックに暗褐色シルトブロック多く混入
- 4 黄色シルト 地山土ブロックを主体としわずかに2~3cm大の暗黒褐色シルトブロック混入
- 5 暗黄色シルト 全体に黒ずんで汚れる。
- 6 埋戻し土 暗灰褐色シルト 2~3cm大の地山土ブロック
- 7 埋戻し土 暗黄色シルトブロック+暗褐色シルトブロック
- 8 埋戻し土 暗灰褐色シルト
- 9 生活堆積 焼土ブロック(2~3cm大)+炭片(2~3cm大)を多量に含む黒褐色シルト
- 10 埋戻し土 8層と同じ
- 11 生活堆積 9層と同じ
- 12 埋戻し土 7層類似でやや淡い。
- 13 埋戻し土 暗灰褐色シルト 地山土ブロックを極少量含む。
- 14 生活堆積 暗褐色シルト 微細な炭片少量を含む。
- 15 生活堆積 14層と同じ
- 16 貼床 濃黄色粘質土 地山土に類似するが汚れて粘性帯びる。
- 17 貼床 16層と同じ
- 18 生活堆積? 暗灰褐色シルト 濃黄色シルトブロック少量含む。
- 19 埋戻し土 13層と同じ
- 20 埋戻し土 13層と同じ
- 21 生活堆積 14層と同じ
- 22 生活堆積 14層と同じ
- 23 貼床 濃黄色粘質土+灰褐色シルトブロック 16層(貼床)に似るが汚れ強い。局所的な補修か
- 24 貼床 濃黄色粘質土+炭片(2~3cm大)
- 25 貼床 23層と同じ
- 26 貼床 17層と同じ
- 27 貼床 17層と同じ
- 28 貼床 17層と同じ
- 29 暗灰褐色シルト
- 30 埋戻し土 12層と同じ
- 31 貼床 16層と同じ
- 32 貼床 16層と同じ
- 33 埋戻し土 黒褐色シルト 2~3cm大の淡黄色シルトブロック極少量含む。
- 34 灰褐色シルト 2~3cm大の淡黄色シルトブロック極少量含む。
- 35 貼床 16層と同じ
- 36 貼床 暗黄色粘質土 16層に類似するが汚れ強い。
- 37 貼床 36層に類似するがやや粗い。
- 38 暗灰褐色シルト
- 39 壁体防護材痕跡? 暗褐色シルト 38層に類似するがやや淡くわずかに粗い。
- 40 地山土 淡黄色シルト 西端では拳大の円礫含む。

図5 竈穴住居SH16平・断面図(1/40、1/80)

左右の掘り込みは竈構築直後ではないにせよ、ある段階では埋戻された可能性が高い。竈内は奥・左右両壁で被熱変色が顕著だが床面はそうではない。竈内は燃料残滓の薄層が幾重にも堆積しており、このような燃料残滓の不十分な掻き出しが床面の被熱を妨げたものと考えられる。

SH16 東西5.4m×南北4.9mの長方形を呈する。残存深は0.15m前後に過ぎないが、貼床と見られる濁黄色粘質土の薄層を確認した。又その直上の生活堆積層（含黄色土粒黒褐色シルト層）より上位に、埋め戻し土らしき粗雑な地山土・黒色系粘質土のブロック状堆積が観察できる。竈は北辺にあって中軸線よりわずかに東に偏る。住居外郭の各辺はわずかに中膨らみとなり、全体としてやや胴張り気味の平面形態となる。検出した支柱穴4基は住居壁面より概ね1m内外の距離を開け柱配置は、東西2.9m、南北2.3~2.4mと整った形態を示す。北東隅柱のみ建替の形跡がある。住居壁溝は東辺の全域と南北辺の一部でかろうじて識別した。溝幅はともかくも総じて浅く、かつ深さは一定ではない。住居南辺付近の床面に径20cm程の扁平な河原石が遺棄されていた。今次調査で全体を確認した3棟の竈穴住居のいずれの床面からもほぼ同大の平石を検出している。竈は、住居掘削時に地山を半島状に削り残して左右袖部とし0.2m強

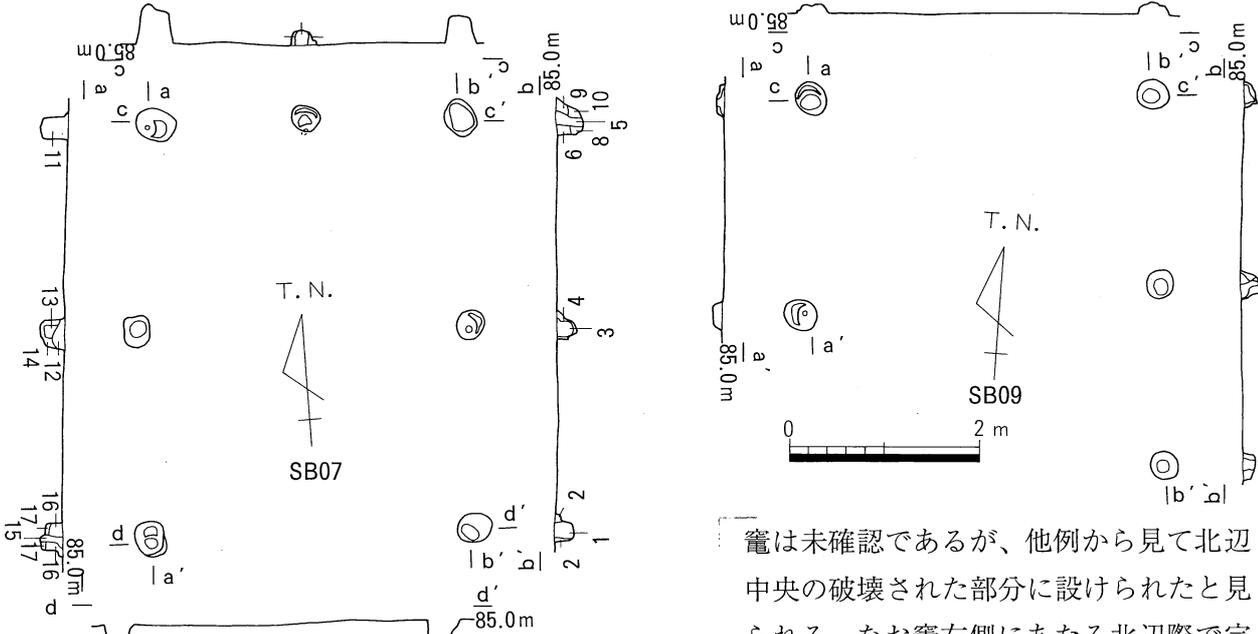


図6 竈穴住居SH12・17平・断面図(1/40、1/80)

の立ち上がりをとどめる。煙道部分は緩やかな勾配を持って短く延びる。両袖はわずかに開きつつ延び、残存長約0.7m、先端部の袖間隔は0.9mとなる。竈内部に相当する床面部分はわずかに皿状に窪むがその程度は明瞭なものではない。袖部内壁のほぼ前面と竈内床面前半部は顕著に被熱赤変するが煙道から竈床面奥半部ではそうではない。竈内には燃料残滓と見られる炭細片・灰および剥落焼土粒が堆積する。興味深いことに床面被熱痕跡の顕著な竈前面部分では薄く、逆に奥部では煙道基部に被さるように分厚く堆積している。さて同層上面を拳大程度に分解した地山類似土のブロックが覆っている。これらはほぼ例外なく下面が極度に被熱赤変しており、竈天井部が崩落・分解したものと考えられる。ただし天井部材は崩落後の分解と移動を経ており、天井孔の位置と規模を知ることは出来なかった。また崩落部材と複雑に重なり土師器小形甕1個体分を検出した。竈に掛けたまま遺棄されたものと推定できる。

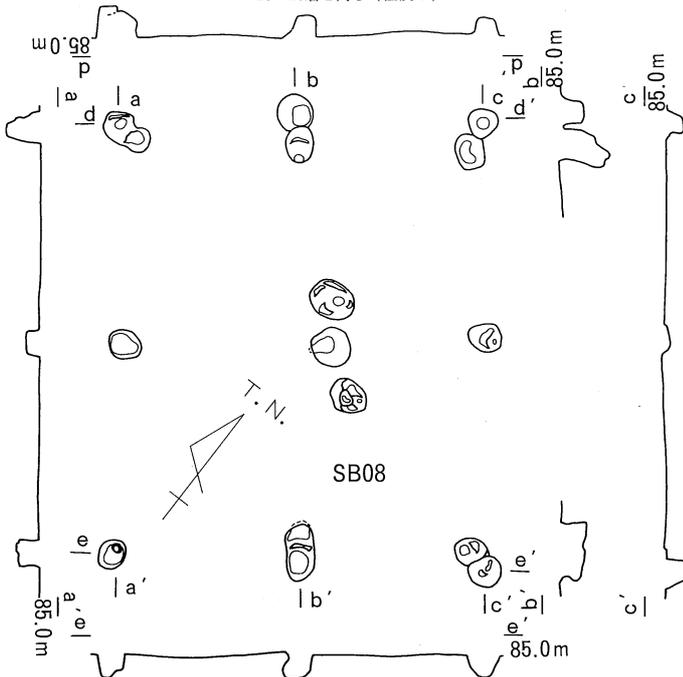
更に崩落天井部・土器片直下において、竈中央部床面に据えられた方柱状自然石（径10cm、長18cm）を検出した。基部を竈内堆積層に埋め込む。竈に掛けた煮沸具の支柱であろう。

**竪穴住居SH12** 用水路によって中程を破壊された竪穴住居。前回調査で西側1/3弱を検出し、今次調査では東辺を確認した。本住居は長方形を呈し東西5.7m、南北4.2mの規模を有する。深さは約0.4mを残し、埋土中位以上には地山土ブロックを交え、埋め戻しの可能性がある。



SB07土層

1 黒褐色シルト（柱痕）	8 6層と同じ	14 黄白色シルト
2 濁黄色シルト	9 6層と同じ	15 黒褐色シルトブロック含む
3 1層と同じ（柱痕）	10 黒褐色シルト	16 黄褐色シルト
4 2層と同じ	11 黄褐色シルト	17 黒褐色シルト
5 1層と同じ（柱痕）	12 黒褐色シルト	18 1層と同じ（柱痕）
6 黄褐色シルトブロック	13 黄褐色シルト	19 14層と同じ
7 1層と同じ	14 黄褐色シルト	
	15 黒褐色シルト	
	16 黄褐色シルト	
	17 黒褐色シルト	
	18 1層と同じ（柱痕）	
	19 14層と同じ	



竈は未確認であるが、他例から見て北辺中央の破壊された部分に設けられたと見られる。なお竈右側にあたる北辺際で完形製塩土器1個体を検出したことは注目できる。主柱穴のうち西辺2基のみは西壁より1.4m内側で検出した。壁溝は西南隅で部分的に確認したにとどまる。

**竪穴住居SH17** SH12の北に位置し、用水路によって中央以西1/3強を失う。南北3.8mを測り、東西方向は北辺で約2m残存する。深さ約0.4mを残す。壁溝・主柱は残存部位で確認していない。なお住居北辺で浅い掘り込みを検出したが、炭・焼土片等を全く含まず、竈に関わる設備の可能性は低い。

#### 掘立柱建物

竪穴住居群の北側にあつて東西に並ぶように3棟の掘立柱建物を検出した。いずれも共伴遺物がなく時期の確定は困難であるが、竪穴住居との関係からこれに近い時期の所産と考えたい。

SB07はこれらの東端に位置する桁行2間（4.4m）、梁間2間（3.3m）の南北棟側柱建物。掘り方は概ね0.3m内外し

図7 掘立柱建物SB07・08・09平・断面図（1/80）

か残存せず、削平のためか南辺棟持柱を欠損する。

S B08は中央に位置する桁行2間(4.5m)梁間2間(3.7m)の南北棟総柱建物。柱通りは良くないが中央に束柱がある。一部を除いて柱穴が重複しており、建て替えが想定できる。

S B09は西端に位置する掘立柱建物。現状では桁行2間(3.9m)、梁間1間(3.5m)となる。但し全体に削平が著しく、掘り方は0.1m内外しか残存していない点や現状の梁間間隔から棟持柱あるいは束柱の欠損を想定すべきかもしれない。(大久保)

### (3) まとめ 一平成5年度・8年度調査の成果と検討課題一

**竪穴住居** 今次調査では合わせて竪穴住居5棟(内1棟は前回検出住居の未検出部分)、掘立柱建物3棟、土坑2、不明周溝状遺構1を検出した。不明周溝1を除いていずれも古墳時代後期後半、TK43式並行期を主体とする極めて限られた期間の所産と考える。この点は前回調査所見と異ならない。本遺跡では古墳時代後期の竪穴住居は累計14棟検出したことになる。床面積では約12㎡～37㎡の格差があるが、いずれも竈を付設する。また12㎡前後の2例は床面に主柱を据えた形跡はないが、20㎡台以上ではいずれも4本主柱が確認できる。住居規模と上屋構造の関係を示す資料である。

竈付設位置は住居北辺と定まっているが、中軸に設置する場合と右にずらす場合とがあるが左に寄ることはない。多くの場合住居形態が東西辺がやや長い長方形を呈していることと合わせ、具体的な理由は不明だが、竈左側に一定の空間を設ける必要を感じていたようである。それゆえ小形住居S H04ではほとんど北辺東隅に接して竈を設けている。

竈構造に2類型があり、それと住居形態に一定の相関が見られることが判った。仮に1・2類として整理しておく。1類は袖基底部分から盛土を築く型式で奥壁で明確な段をもって煙道に続き、それは水平に長く延びる。しばしば床面を浅く穿ってから袖を構築する。竈袖裏面まで壁溝が続くことが多い。S H03・S H14が典型例である。2類は竪穴掘削時に竈袖に相当する部分を削り残しておく。これを基礎に竈を築き上げる。奥壁からなだらかな勾配を持って煙道に続き短い。S H16を典型例とする。さて竈1類を付した住居平面形態は各辺が直線的で四隅は明瞭に直角をなす。これに対して竈2類住居は各辺が緩やかに湾曲し胴張り方形を呈する。

本遺跡では1類が圧倒的に多い。類型差が住居規模・時期差を反映する証拠はない。これまで県内の調査報告では竈構造に詳細な観察を加えた例が少なく厳密な比較検討は難しいが、坂出市下川津遺跡では地山を削り残した2類が圧倒的に多い。竈構造に関する報告がなく図示された煙道形態からの類推だが、逆に善通寺市中村廃寺遺跡、三豊郡高瀬町大門遺跡など丸亀平野西部以西の諸例では1類が卓越するらしい。この傾向が動かないとすれば、竈の二類型は地域差として捉えられる可能性が高く興味深い。

さて竪穴住居14棟の分布は各々3～6棟よりなる3つのグループに分かれる。グループ間で明瞭な時期差はなさそうである。現時点では併存する3群と考える。また住居規模・竈類型その他についても現時点では際だった差異は確認していない。各群の住居は相互にかなり近接し、全てではないにせよ、その多くは同時併存を想定しがたい。したがって検出した14棟は $3 + \alpha$ 棟の住居が建て替えを重ねた累積と考えておきたい。この推定が正しければ、出土遺物の示す集落存続期間から考えて、各住居はかなり頻繁に、そして住居規模の差異を考慮すると、意図的に建て増し(減らし?)を繰り返した事になる。

**掘立柱建物** 掘立柱建物は計9棟検出している。総柱建物は可能性まで考慮して最大3棟想定できる。いずれも今回調査例で2間×2間 床面積20㎡未満の小形建物である。(S B07・08・

09) 側柱建物には、床面積約35m<sup>2</sup>、50m<sup>2</sup>の大型建物2棟と10～20m<sup>2</sup>の小形建物3棟がある。最大規模のS B 03はやや柱通りが揃わないが桁行4間梁間3間の規模を有する。これに次ぐS B 01は桁行4間梁間2間だが、桁方向が長い長屋風の形態を示す。小形建物3棟はいずれも桁行3間梁間2間で柱間寸法の差異が床面積の差異となっている。

前回調査のS B 01は出土した黒色土器A類片から平安時代中期に比定できるが、これを除き他は良好な伴出遺物を欠いており直接的な時期決定は困難である。ただし間接的な検討材料としては以下の点が考慮できるであろう。

これまでの調査で古代以降の遺構は検出していないが、西側微高地縁辺の包含層資料は古墳時代後期を中心として平安時代初期までの遺物を含む。したがって検出遺構は他に根拠がなければ取りあえずこの時間幅で理解することが一つの方法であろう。また9棟の掘立柱建物は全て竪穴住居間の空隙に位置しており、それと重複する例はない。平安時代中期に比定したS B 01もその一例であるから決定的な根拠とはしがたいが、全てが竪穴住居を偶然除けたと考えることも難しい。同時期か極めて近接した時期の建物を含む可能性を考慮したい。また建物主軸を検討すると竪穴住居軸のばらつき幅に概ね収まる7棟とこれと微妙に異なる2棟とに分かれる。因みに後者の1棟は先に述べたS B 01である。この点も建物の時期を検討するのに示唆的な材料である。現時点では結論づけられないが、集落構成の理解に不可欠な問題なので敢えて検討材料を提出した。

**出土遺物** 出土遺物は豊富とはいえないが、幾つかの興味深い問題を含んでいる。検出遺構の時期比定は、現時点では専ら須恵器に頼ることになる。総計90個体弱出土している蓋坏は、概ね身口径13cm弱、蓋口径13.5cm前後となる。前回概報に掲載したように蓋はまだ肩が比較的明瞭な箱形を呈するものを多く含み、身立上りは、比較的高い。外面のほぼ $\frac{2}{3}$ 強に回転篋削りが及ぶ。こうした特徴からTK43式並行期を主体とすると見なし得るだろう。またわずか1点ではあるが出土した高坏脚部片は長脚二段三方透孔が観察できる。なお須恵器他器種ではハソウ・高坏・小形壺・提瓶等があるが、いずれも2～数個体の破片に過ぎない。現時点で個体数の算定はやや困難であるが大小を問わず貯蔵容器の甕類が著しく乏しい。かなり単純な組成を示すといえよう。また蓋坏・甕類に顕著だが焼成不良品を多く含む点も注目したい。

土師器類は圧倒的に煮沸具が多い。まだ十分な基礎整理を経ていないので確定は難しいが甕に大小2種が見られることは間違いない。小形甕は口縁の萎縮したむしろ深鉢形を呈するものが多そうである。また大型甕では長胴形と球形の差がある。他に甑が存在するが極めて少ない。食器では高坏・小形鉢が確認できるが、量的には須恵器食器類の割にも満たない。成形・調整共に全体に鈍重で、大型甕の一部を除いてハケ・削り調整を欠く点が特徴の一つといえる。下川津遺跡例などに見るTK217式並行期以降の土師器類との格差は極めて大きい。なお胎土から土師器類は2～3系統に分類できそうである。

製塩土器は完形品1個体を含め少なくとも5個体を確認した。いずれも被熱痕が顕著で塩飽諸島周辺産の可能性が高い。本地方の当該時期集落では若干量の製塩土器の搬入はもはや普遍的現象とみてよい。ただし塩需要を完全に満たす分量とは考えられないので特別な用途を想定した方が良さそう。

**鉄滓** 溶融炉壁片？ 砥石大小各種の鉄加工関連資料も少数出土している。この点も当該時期集落の普遍的現象である。但しいずれも量的に乏しく継続的な操業を疑わしめるものである。当該時期の鉄鍛冶のあり方を示唆するものであろうか。(大久保)

## 2. 西浦谷遺跡

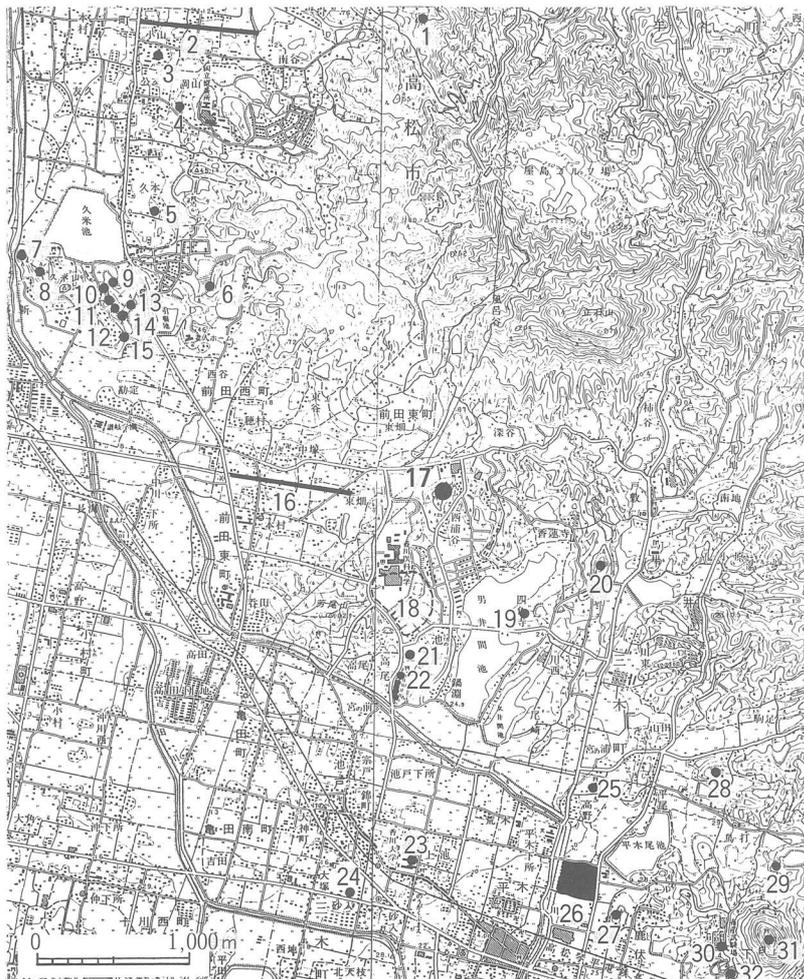
### (1) 遺跡の立地と環境

西浦谷遺跡は、高松市と三木町の境に近い標高約60mほどの丘陵部に位置する。名前の示すとおり、立石山から西へのびる尾根が南へと曲がって開けている谷筋の一番奥にあたる。南西方向には、芳尾山があり眺望は遮られているが、南東から南へは眺望が開け、三木町の中心域から遠くは讃岐山脈の山々が見渡せる。また、西方向にも視界が開け、高松市街地が一望できる。

本遺跡周辺の遺跡については、旧石器時代のものはほとんど見つからないが、久米池南遺跡や前田東・中村遺跡で遺物が確認されている。

縄文時代については、本遺跡のすぐ西の前田東・中村遺跡で旧河道より後期前半の土器が大量に発見された。また、晩期の土坑やピットが確認されている。

弥生時代については、香川大学農学部構内より前期末の土器が出土している。中期の遺跡は、周辺でたくさん見つかり、前田東・中村遺跡では、竪穴式住居や方形周溝墓などの遺構、製塩土器を含む多種の遺物が見つかる。この遺跡については、後期にあたる遺構・遺物も多く確認されている。久米池南遺跡でも、中期後半の竪穴式住居、掘立柱建物、段状遺構、土坑墓などが確認され、多くの土器・石鏃・鉄製工具などの遺物のほか、土坑墓内より鉄剣が出土している。久米池遺跡群墓地地区では、中期後半の壺棺・甕棺・箱式石棺墓・木棺墓が検



- 1 大空遺跡
- 2 小山・南谷遺跡
- 3 小山古墳
- 4 山下古墳
- 5 久本古墳
- 6 北山古墳
- 7 諏訪神社古墳
- 8 久米池遺跡群墓地地区
- 9 久米池南遺跡
- 10 西茶白山2号墳
- 11 西茶白山1号墳
- 12 高松茶白山西古墳
- 13 高松茶白山東古墳
- 14 高松茶白山古墳
- 15 高松茶白山南古墳
- 16 前田東・中村遺跡
- 17 西浦谷遺跡
- 18 権八原古墳群
- 19 七ツ塚古墳
- 20 富士の越山頂古墳
- 21 池戸八幡裏古墳
- 22 池戸八幡古墳群
- 23 香川大学農学部遺跡
- 24 砂入遺跡
- 25 高尾八幡社古墳
- 26 鹿伏・中所遺跡
- 27 天神山古墳群
- 28 駒足古墳群
- 29 鳥打大西谷古墳群
- 30 白山1遺跡
- 31 白山2遺跡
- 32 白山3遺跡

図8 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

出されている。また、白山周辺で中期後半の遺跡が確認されており、竪穴式住居や箱式石棺などの遺構のほか、白山1遺跡で袈裟襷文銅鐸が出土している。後期の遺跡は、本遺跡北方の大空遺跡があり、ここで出土した土器は県下弥生時代後期前半の指標とされている。また、権八原古墳群C地区では、尾根を幅広い溝で切断して作り出された墳丘墓が注目されている。組合せ式石棺を主体部とするこの墳丘墓は、弥生時代終末から古墳時代初頭のものと考えられる。鹿伏・中所遺跡（現県立三木高校）は、後期における集落跡と考えられ、多数の竪穴住居と多量の後期後半の土器が出土している。

古墳時代については、明確な集落跡は確認されていないが、砂入遺跡で前期の竪穴式住居5棟が検出されている。古墳は、周辺にたくさん確認されていて、前期のものとしては、高松茶臼山古墳が知られている。墳丘全長約75m、後円部径約37mの前方後円墳で2基の竪穴式石室がある。1号石室は板状石の持ち送り小口積みで、朱に染められた碧玉製鍬形石、画文帯重列神獸鏡、各種玉類、鉄剣や鉄鏃などの鉄製品が出土している。2号石室は自然礫を用いており、鉄製品が出土している。この古墳には、他に6期の埋葬施設が確認されている。他にも、この古墳の周辺には多くの古墳が存在している。池戸神社古墳群の1号墳は、柄鏡形の前方後円墳で前期末から中期初めの可能性がある。中期のものとしては、現在は香川医科大学が建設され面影はないが権八原古墳群が知られる。16基の小円墳群でほとんどが周溝を伴っており、5世紀後半のものと考えられている。後期のものとしては、本遺跡北方に久本古墳、山下古墳、小山古墳（消滅）があり、いずれも横穴式石室を持つ巨石墳である。特に、久本古墳は、県下で唯一玄室奥壁に作り付けの石棚を備える構造を持ち、石棚の下から亀甲型陶棺が見つまっている。副葬品についても、県下で唯一承台付銅鏡が出土している。（樋本）

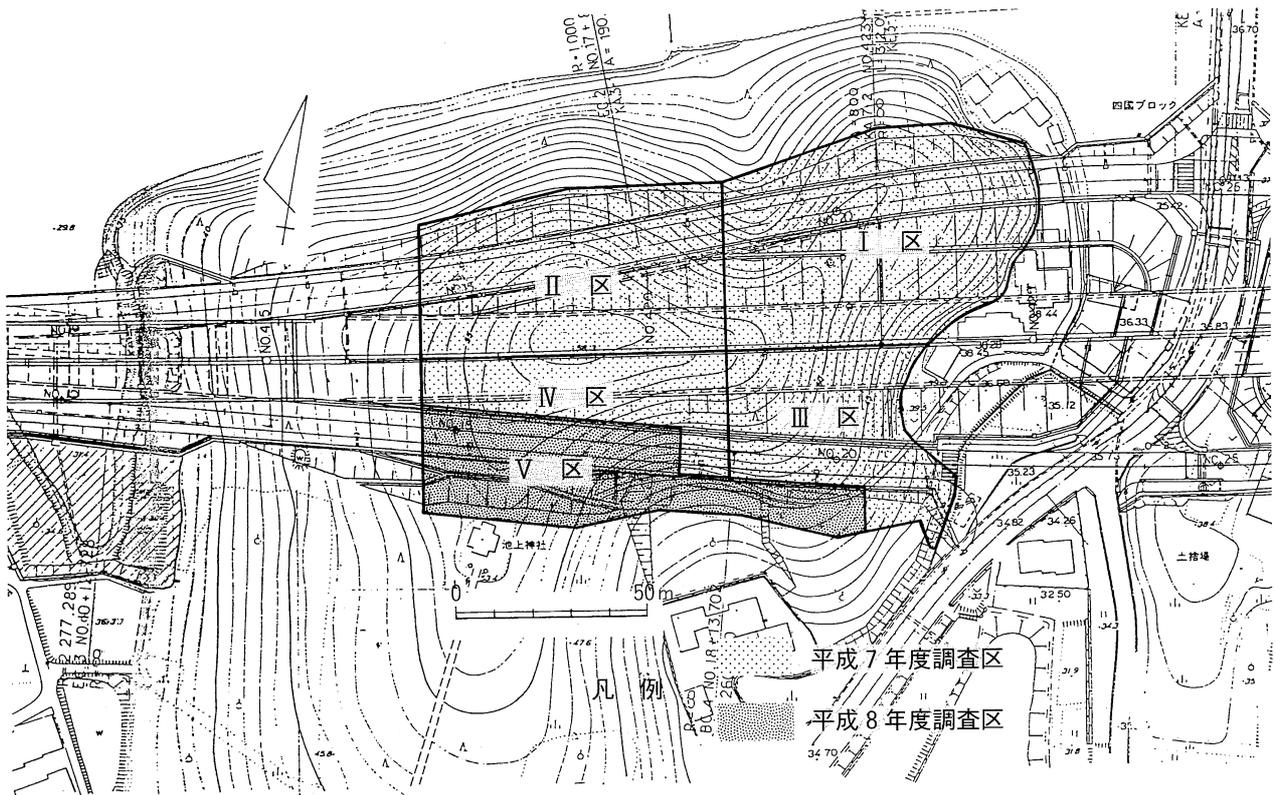


図9 調査区割図 (1/2,000)

(2) 調査の概要

平成7年度調査区の南側隣接地の調査を行った。平成7年度は丘陵の頂部と北斜面、東斜面の調査を行い、横穴式石室を主体部とする古墳1基と弥生時代の集落が検出された。今年度は丘陵の南半分の調査を行った。調査対象地の西部は丘陵の西斜面にあたり、顕著な遺構は検出されなかったが、丘陵の南斜面には、昨年度と同様弥生時代の遺構・遺物が検出され、弥生時代集落は丘陵の頂部、東斜面から南斜面にかけて営まれたことが確認できた。なお、昨年度の調査では北東に伸びる丘陵尾根上に横穴式石室を主体部とする古墳1基（西浦谷1号墳）が検出されたが、今年度の調査では古墳は検出されなかった。

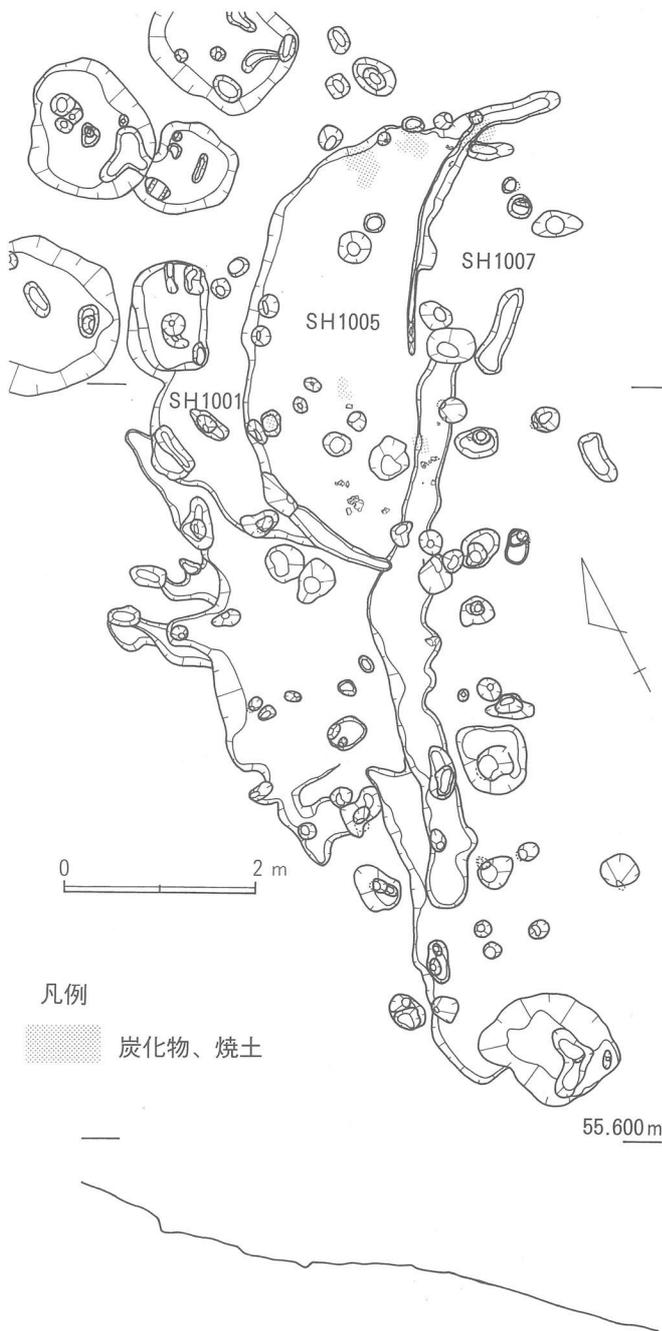


図10 S H1001・1005・1007平・断面図 (1/40)

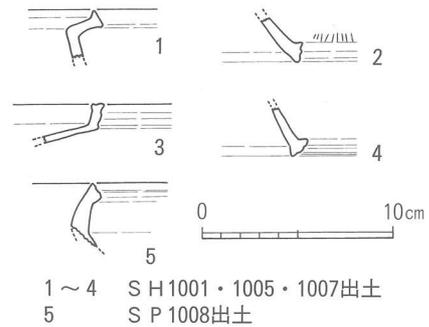


図11 S H1001・1005・1007、S P 1008出土土器 (1/4)



写真1 S H1001・1005・1007付近 (西から)



写真2 S H1001・1005・1007付近 (西から)



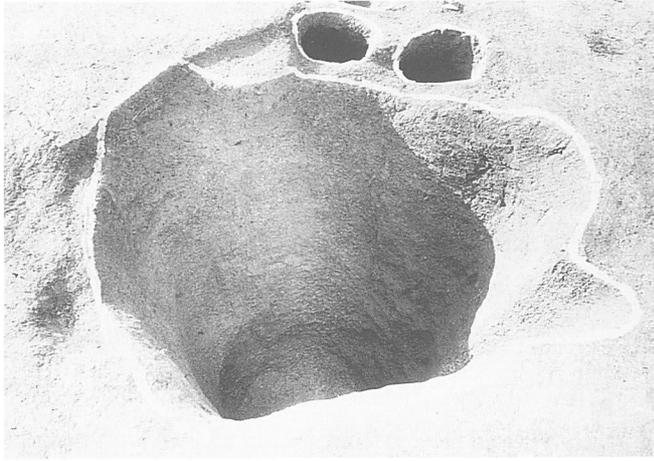


写真3 SE1001 (東から)



写真4 SK1018 (南から)

本遺跡の発掘調査は昨年度からの継続事業であるため、地区割りは昨年度までの設定を踏襲し、今年度調査区全体をV区とし、昨年度同様、道路中心線を基準とする20mごとのグリッドを設定した。遺跡の南端(421R40杭、422R40杭、423R40杭付近以南)では後世の開墾のため削平を受け、平坦面を形成しており、また、果樹栽培のための攪乱坑が多く、遺構の残存状況は極めて悪かった。

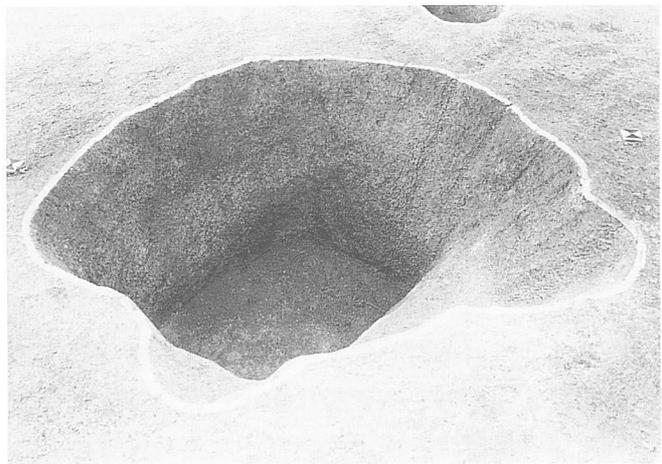


写真5 SK1007 (東から)

#### 弥生時代

弥生時代の遺構は丘陵の南斜面から東斜面にかけて検出された。遺物量は極めて少量であったが、いずれも弥生時代後期前半のものであった。なお、丘陵の西斜面では遺構は希薄で、遺物もほとんど出土しなかった。丘陵の南斜面からは竪穴住居5棟、段状遺構2、土坑6基、柱穴約500個が検出された。昨年度の成果と合わせると、主に丘陵の頂部から南斜面、南東斜面にかけて集落が営まれたことがわかる。なお、集落を取り巻く環濠や、墓地は検出されなかった。

#### 竪穴住居

SH1001・1005・1007 丘陵の南東斜面で検出された。昨年度検出された良好な遺存状態の焼失家屋SH14の南東側に位置する。数棟の竪穴住居が重複しており、多数の柱穴が検出された。壁溝の存在から、少なくとも3棟の竪穴住居が存在したことがうかがわれるが、住居の下半分は残存しておらず、竪穴住居の全体は不明である。SH1001・1005・1007は住居の上半分の形態から平面形はいずれも円形を呈し、径4.5~6.0mを測るものと考えられる。SH1005からは少量ではあるが、竪穴住居全体に焼土が検出されたことから、焼失家屋であるものと考えられる。なお、炭化材は検出されなかった。また、SH1005の焼土の分布範囲から、南東側に重複するSH1007よりもSH1005のほうが新しいことがうかがわれる。

#### 井戸

SE1001 池上神社の北方に位置し、南に伸びる尾根上に検出された遺構である。平面形は不整形円形を呈し、径1.2~1.3mを測る。底面は平坦で、底面径0.5mを測る。埋土は黄色砂質土の

下層に花崗岩小礫混じり黄灰色砂質土が堆積する。遺構の深さは1.5mを測る。S E 1001は標高54m、尾根の頂部から3m程度低いところに位置する。S E 1001は雨水の溜まりやすい場所であったらしく、調査中常時湧水がみられたことから、水を溜める井戸のような機能をもっていた可能性が考えられる。遺物は弥生土器小破片が出土しただけである。

### 土坑

土坑は底面に小穴をもつものと、底面が平坦で、小穴をもたないものの2種類が存在し、前者の機能は落とし穴、後者は貯蔵穴であると考えられる。6基の土坑が検出されたが、S K 1025・1018は落とし穴で、S K 1001・1002・1017・1007は貯蔵穴であると考えられる。なお、S K 1025・1018からは遺物は出土しなかった。

S K 1007 S H 1001・1005・1007の西方に位置し、南方に伸びる尾根上に位置する。平面形は不整円形を測り、3.7～4.2m前後を測る。底面は平坦で、底面径0.6m前後を測る。埋土は黒黄色砂質土、黄灰色砂質土である。底面には小穴はみられなかった。貯蔵用の土坑であったものと考えられる。遺物は弥生土器小破片が少量出土しただけである。

### (3) まとめ

平成7年4月から西浦谷遺跡の調査を開始したが、今年度は遺跡の南半分を調査し、平成7年度に検出された弥生時代集落の南部を検出した。

丘陵の南斜面では竪穴住居・段状遺構・柱穴・土坑などが検出された。多数の柱穴が検出されたことから、掘立柱建物を構成する柱穴も存在すると考えられるが、掘立柱建物の存在については今後の検討を要する。遺構の所属時期については、出土遺物は少量で、小破片が多く、詳細な時期のわかる資料は少ないが、弥生時代後期初頭のものと考えられる。

西浦谷遺跡は丘陵上に所在する高地性集落である。だが、のろしをあげた痕跡と考えられるような焼土を埋土とする土坑や、集落を防御する環濠などは検出されなかった。西浦谷遺跡では主に丘陵の頂部及び南斜面から東斜面にかけ竪穴住居などの遺構が検出された。竪穴住居の周辺の斜面では丘陵を段状に削り、通路や作業場所を設けていた。また、住居の周囲からは貯蔵穴と考えられる土坑が多数検出された。竪穴住居の周囲からは多数の柱穴も検出されたことから、掘立柱建物も存在したと考えられる。大半の柱穴は径0.3～0.6mを測り、平面形は円形を呈する。昨年度、丘陵の頂部やや東寄りで検出された掘立柱建物S B 01は2間×1間(2.1×4.2m)の掘立柱建物で、柱穴の平面形は方形を呈し、一辺0.7～1.2mを測る大きな柱穴で構成される。このような大きな柱穴で構成された掘立柱建物は昨年度の調査区では他に検出されておらず、今年度の調査区、丘陵の南斜面・東斜面においても検出されなかった。S B 01は丘陵の東方から南方が一望でき、眺望の良い場所に立地することから、特別な用途をもつ建物であった可能性も考えられよう。また、日常生活遺構の中でも墓と考えられる遺構は検出されなかったことから、墓地は集落と隔たった場所に形成されたものと考えられる。(森下)

### Ⅲ. 資料整理の概要報告

#### 1. 鴨部・川田遺跡

鴨部・川田遺跡は大川郡志度町鴨部に位置している。高松東道路建設に伴い、平成2年度と3年度に合計12,000㎡の発掘調査を実施した。整理作業は平成2年度調査分について昨年度から開始しており、本年度がその2年目である。

本年度は遺構・遺物のトレース、遺物観察表の作成、写真図版のレイアウト、原稿執筆を中心に行った。また昨年度に続き遺物の写真撮影を行った。報告書の刊行業務は平成9年度に実施する予定である。

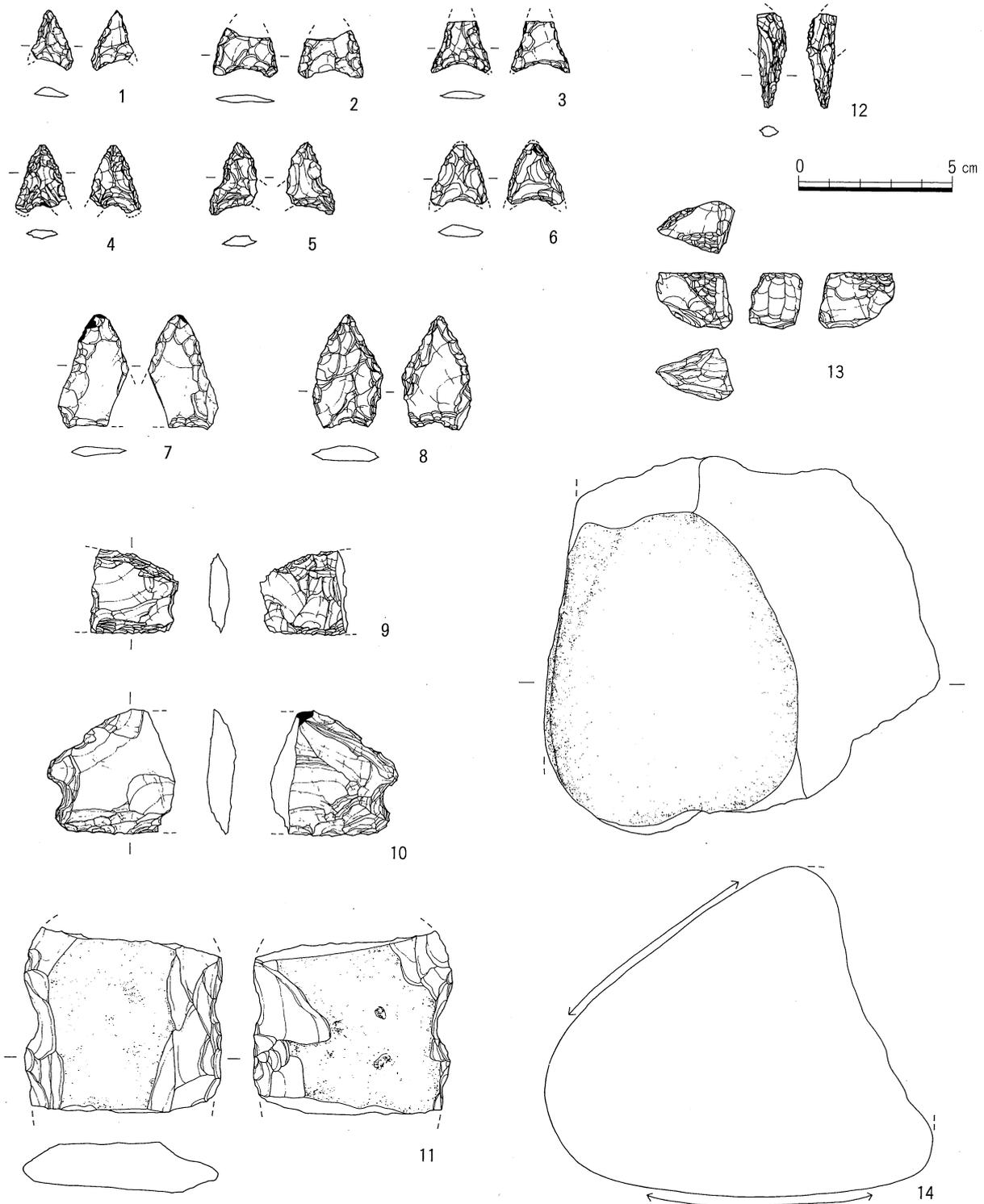
整理作業の結果、弥生時代前期の集落は前期後半に集落が成立し、前期後半のある段階で環濠集落の形態をとり、環濠が埋没後の中期にも一部集落が続くことが判明した。住居は23棟を検出したが、地面を明確に掘り込む竪穴住居と、掘り込みを持たずに柱穴のみが巡る平地式住居とが混在している。弥生時代前期の遺構面直上には当該期の濃密な遺物包含層が形成されていることと、包含層の上には鴨部川の洪水砂層が厚く堆積しており、遺構の削平が考えにくいことから平地式住居を考慮したが、今後もおお検討の残るところである。

遺物では弥生時代前期後半を中心とする多量の土器・石器が出土している。平成3年度調査区の内容を合わせないと遺跡全体のことが判明しないので、平成2年度調査分については土器・石器ともに統計的処理を中心に行い、平成3年度調査分を加えた全体の分析が出来るようにした。土器に関しては口縁部の形態や文様構成、石器に関しては石材と重量を中心に統計処理し、未実測のすべての細片まで対象とした。

なお、実測を行ったが本報告書には掲載出来なかった石器をここで掲載して、報告書の補充とする。3・7・8は素材の剥離面が残っている石鏃である。11は両側縁部がくびれているが、この部分で柄に装着したものと考えられる。13は稜柱状の細石刃核で、打面は1回の剥離により形成している。作業面は下部で力がうまく抜けておらず段状になっている。(森)

作業内容／月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺構・遺物トレース	■											
遺物写真撮影		■										
写真図版作成				■								
遺物観察表作成				■								
原稿執筆	■											
編集										■		

表2 平成8年度鴨部・川田遺跡整理作業工程



遺物番号	器種	出土遺構	現存長	最大幅	最大厚	重量	石 材	形態・手法の特徴	備 考
1	石鏃	D区SH05	2.0	1.4	0.3	0.5	サヌカイト	凹基	
2	石鏃	A区包含層	1.6	2.1	0.3	0.9	サヌカイト	凹基	
3	石鏃	D区包含層	1.7	1.9	0.3	0.7	サヌカイト	凹基	
4	石鏃	D区SH02	2.2	1.6	0.3	0.9	サヌカイト	凹基	
5	石鏃	C区SH02	2.4	1.6	0.4	0.9	サヌカイト	凹基	
6	石鏃	D区包含層	2.0	1.9	0.4	1.3	サヌカイト	凹基、風化	
7	石鏃	A区包含層	3.7	2.3	0.3	2.8	サヌカイト	平基だが基端部が僅かに突出する	
8	石鏃	A区包含層	3.7	2.2	0.6	4.6	サヌカイト	凹基	
9	楔形石器	A区包含層	2.9	2.8	0.6	6.0	サヌカイト	両極打撃の痕跡明瞭	
10	打製石庖丁	A区SD04	4.2	4.1	0.8	16.0	サヌカイト	側縁部に挟り	
11	石鏃	A区包含層	6.1	6.4	1.7	103.0	安山岩	側縁部中央部がくびれる	
12	石鏃	A区包含層	3.1	1.0	0.4	1.5	サヌカイト	錐部	
13	細石刃核	D区包含層	2.5	1.8	1.7	7.8	サヌカイト	打面形成→側面調整	
14	砥石	D区SH05	12.5	12.9	10.8	1726.0	砂岩	2面使用	

図13 鴨部・川田遺跡出土遺物 (1/2)

ふりがな	こくどうバイパスけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
巻次	平成8年度							
編著者名	大久保徹也 森格也 森下友子 樋本清輝 高橋佳緒里							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局							
発行年月日	1997年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
22p	2p	20p	0p	0p	5枚	13枚	0枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町	遺跡					
吉野下秀石遺跡	香川県仲多度郡 満濃町吉野			34° 11′ 21″	133° 50′ 54″	960601~ 960831	1,190	満濃バイパス建設 に伴う事前調査
西浦谷遺跡	香川県木田郡 三木町池戸	37341		34° 17′ 39″	134° 7′ 47″	961001~ 970131	2,272	高松東道路建設に 伴う事前調査
鴨部・川田遺跡	香川県大川郡 志度町鴨部	373		34° 17′ 45″	134° 17′ 12″	—	—	高松東道路建設に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉野下秀石遺跡	集落	古墳時代 後期	竪穴住居 5 掘立柱建物 3	須恵器 土師器 製塩土器 鉄滓 砥石				
西浦谷遺跡	集落	弥生時代 後期	竪穴住居 段状遺構 土坑	弥生土器 石器		高地性集落		
鴨部川田遺跡	集落	弥生時代 前期	環濠 竪穴住居 土坑	弥生土器 磨製石斧類 石包丁(含未製品) 木器(含未製品)		環濠集落		

国道バイパス建設に伴う

## 埋蔵文化財発掘調査概報

平成8年度

平成9年3月31日

編集 〒762 香川県坂出市府中町字南谷5001-4  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
発行 香川県教育委員会  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
建設省四国地方建設局  
印刷 株式会社中央印刷所